

榛原町内遺跡発掘調査概要報告書 1993年度

榛原町文化財調査概要 11

1994

榛原町教育委員会

例　　言

- 1 本書は奈良県宇陀郡榛原町内に所在する「榛原町内遺跡」の発掘調査概要 報告書（榛原町文化財調査概要 11）である。
- 2 調査は、平成5年度（1993年度）に国庫補助事業・県費補助事業として榛原町教育委員会が実施し、平成5年11月1日に着手し、平成6年3月31日に終了した。
- 3 現地調査は、奈良県教育委員会の指導のもと榛原町教育委員会技師 柳澤一宏が担当した。
- 4 調査組織および関係者は、各本文中に詳しい。
- 5 各遺跡の調査記録、遺物等は榛原町教育委員会において保管している。
- 6 本書の執筆・編集は柳澤が行った。

目 次

I 埋蔵文化財発掘調査の概要	1
II 位置と環境	4
1 地理的環境	
2 歴史的環境	
III 自明廣田遺跡発掘調査概要	7
1 調査の契機と経過	
2 位置と環境	
3 遺跡の調査	
4 まとめ	
5 抄録	
IV 下城・馬場遺跡第2次発掘調査概要	11
1 調査の契機と経過	
2 位置と環境	
3 遺跡の調査	
4 まとめ	
5 抄録	
V 南山古墳第2次発掘調査概要	22
1 調査の契機と経過	
2 位置と環境	
3 遺跡の調査	
4 まとめ	
5 抄録	

I 埋蔵文化財発掘調査の概要

榛原町では、1968年（昭和43年）以降、土木工事等の開発行為にともなう埋蔵文化財の発掘調査が本格的に行われており、その件数は年々増加傾向にある。今後も町内各所で多くの開発行為が計画されており、埋蔵文化財の取り扱い等については、事業者等とその都度、協議を重ねているところである。1993年度（平成5年度）までに榛原町教育委員会が取り扱った発掘届・通知、発掘調査等は表1のとおりである。また、1993年度（平成5年度）に実施した発掘調査等は表2のとおりである。

本書には国庫補助事業・県費補助事業として実施した白明廣田遺跡、下城・馬場遺跡、南山古墳の3遺跡の発掘調査概要を収録している。他遺跡の発掘調査概要については、別途刊行の『榛原町埋蔵文化財発掘調査概要報告書 1993年度』を参照いただきたい。

表1 発掘届・発掘調査件数等一覧表

摘要	年 度	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993
		昭和59	昭和60	昭和61	昭和62	昭和63	平成元	平成2	平成3	平成4	平成5
遺跡踏査願		4	5	5	1	4	3	4	2	2	2
発掘調査届(法57-2)		0	0	0	3	2	0	4	4	11	3
発掘調査通知(法57-3)		3	3	3	6	13	6	9	4	7	7
発掘調査届・通知合計		3	3	3	9	15	6	13	8	18	10
発掘調査(町教育委員会担当)		2	4	4	4	4	3	7	7	6	8
立会調査(町教育委員会担当)		0	0	1	2	3	1	0	0	3	2
測量調査(町教育委員会担当)		0	0	0	0	0	0	0	1	1	0
調査件数合計		2	4	5	6	7	4	7	8	10	10



写真1 下城・馬場遺跡調査関係者（一部）

表2 1993(平成5)年度発掘調査等一覧表

番号	調査別	棟原町遺跡地図番号 奈良県遺跡地図番号	遺跡名	調査地	現地調査期間	調査原因 (原因者)	調査面積 (m ²)
1	発掘調査	1-15 12-D-34	岩尾火葬墓群接 地	棟原町荻原 2741-144	1993.5.12～ 1993.5.25	無線塔建設工事 (関西セラーラー 電話株式会社)	50
2	発掘調査	2-212～ 2-220 15-B-91 15-B-92	篠東向山古墳群	棟原町篠東 41-2ほか	1993.6.22～ 1993.10.31	農道建設工事 (大字陀町)	820
3	発掘調査	3-46 103-46	松牧遺跡 (第3次調査)	棟原町松牧 2107-4	1993.9.20～ 1994.1.13	公園造成工事 (棟原町)	800
4	発掘調査	(未登載)	山辺三 マルズカ遺跡	棟原町山辺三 317・332	1993.9.24～ 1993.9.30	公園造成工事 (棟原町)	152
5	発掘調査	4-5 (未登載)	自明廣田遺跡	棟原町自明 1356	1993.11.15	農地造成工事 (個人)	12
6	発掘調査	2-546 15-D-90	下城・馬場遺跡 (第2次調査)	棟原町沢 1292、1293	1994.1.18～ 1994.3.18	農地改良工事 (個人)	195
7	発掘調査	1-98 15-B-8	丹切遺跡 (第5次調査)	棟原町下井足 46-1、47	1994.2.14～ 1994.2.28	店舗建設工事 (棟原サン開発 株式会社)	70
8	発掘調査	1-18 12-D-6	南山古墳 (第2次調査)	棟原町荻原 元玉小西 1868-1	1994.3.14～ 1994.3.29	範囲確認調査 (棟原町)	27
9	立会調査	1-98 15-B-8	丹切遺跡	棟原町荻原 元荻原 344、345	1993.4.9	農地造成工事 (個人)	
10	立会調査	4-23 105-3	八瀧長坂遺跡	棟原町八瀧 1125ほか13筆	1994.3.4	農地改良工事 (個人)	

調査概要		遺跡概要	備考
遺構	遺物		
なし	砥石(近代?) 1点	奈良時代の墳墓調査地	
1号墳—円墳、割竹形木棺1、土器棺 2号墳—精円形墳、割竹形木棺2 7号墳—円墳、周溝 8号墳—円墳?、箱形木棺1 9号墳—円墳、周溝	1号墳—須恵器、土師器、鉄鏃、 鐵刀子、 弥生土器ほか 2号墳—須恵器、土師器、鉄鏃、 鐵刀子、玉類ほか 7号墳—須恵器、土師器ほか 8号墳—須恵器、金環、鉄鏃 9号墳—須恵器、土師器ほか	5世紀後葉～ 6世紀前葉の古墳群(11基)	1994年一部継続調査予定
土坑、ピット、石列他	サスカイト、弥生土器、須恵器、 土師器、瓦器、鉄釘ほか	縄文時代～中世の 遺物散布地	1994年継続調査予定
なし	サスカイト、弥生土器、須恵器、 瓦器、土師器、陶器	弥生時代、古墳時代、 中世の遺物散布地	
なし	なし	縄文時代、中世の 遺物散布地	本報告
礎石建物、据立柱建物、土坑、ピット、溝	サスカイト、須恵器、瓦器、土師器、 陶磁器、鐵貨、鉄釘、犬形土製品、銅製品ほか	縄文時代、弥生時代、 古墳時代の遺物散布地 中世の居跡跡	本報告 1994年継続調査予定
なし	須恵器、黒色土器、土師器	縄文時代～中世の 遺物散布地	
墳丘盛土	須恵器、土師器	飛鳥時代(7世紀) の磚積石塗墳	本報告 1994年継続調査予定
なし	なし	縄文時代～中世の 遺物散布地	
なし	なし	縄文時代～中世の 遺物散布地	

II 位置と環境

1 地理的環境

奈良盆地の東方の山間部に宇陀と呼ばれている地域が広がっており、現在の行政区画では大字宇陀町、榛原町、菟田野町、室生村、曾爾村、御杖村からなっている。この宇陀地方は地理的な状況から西半と東半に大別でき、一般に前者が「口宇陀」、後者が「奥宇陀」とも総称されている。口宇陀は標高300~400mの丘陵とこの間を縫って流れる中小河川が複雑に入り乱れ、これらが幾つもの小盆地や深い谷地形を形成しており、口宇陀盆地とも総称され、大字宇陀町、榛原町、菟田野町の大半がここに含まれている。これに対し、東部の奥宇陀は室生山地、高見山系などの鋭い山々が連なっており、奥宇陀山地とも呼称されている。口宇陀地域の主要河川は、西に宇陀川、東に芳野川があり、幾つもの小河川を合わせながら榛原町荻原で宇陀川本流となる。榛原町を後にした宇陀川は三重県で名張川となり、木津川、淀川を経て遠く大阪湾へと至り、大和川流域とは水系を異にしている。

榛原町の四周は概ね標高約400~800mの山塊に囲まれ、東は高城岳、三郎岳、室生村へと通じる石割峠があり、北は大和高原とをわける額井岳、香駒山、鳥見山などの山々が屏風状に連なり、宇陀の地を見下ろしている。西は桜井市や大宇陀町、南は菟田野町となっており、丘陵をもってそれぞれの境界としている。地形的にみれば榛原町の西半は口宇陀的、東半は奥宇陀的な様相を呈している。

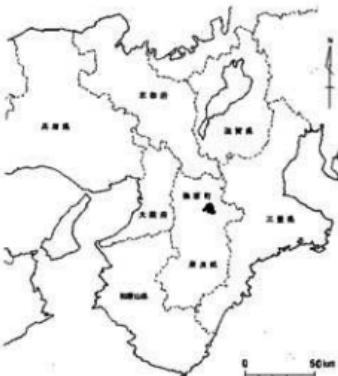


図1 榛原町位置図

2 歴史的環境

宇陀地方は、『古事記』、『日本書紀』をはじめとする多くの文献にも度々登場し、軍事・交通の要衝であったことを窺い知ることができ、今に残る地名や伝承なども多い。また、榛原町を流れ宇陀川・芳野川・内牧川流域の各所には多くの遺跡が分布しており、発掘調査・分布調査を重ねるたびにその数も増加している。

これまでに、宇陀郡内では3点の有舌尖頭器が出土しており、うち、2点が町内から出土していることが明らかとなっている。これらは、旧石器時代末期から縄文時代草創期に求めることができ、この頃が宇陀の歴史の初蕭であろう。

縄文時代の遺跡の多くは、先述の河川流域の河岸段丘上、尾根上、谷部等に認められる。これらの遺跡の多くは、採集遺物によっているため、その実態が必ずしも明らかとはいえない。また、発掘調査によって確認された場合でも、数点の遺物が出土しているのみで遺跡の全容が明らかになったものは少ない。このような状況のもと高井遺跡では、早期から後期にわたる集落跡であることが発掘調査によって明らかとなっている。

弥生時代前期から中期の遺跡は、沢遺跡、下城・馬場遺跡、大貝ヒジキ山遺跡、上井足北出遺跡をはじめとする数遺跡が知られているにすぎないが、後期の遺跡は比較的多く認められる。これらは、地理的制約のためか奈良盆地で見られるような大規模な集落ではないが、次代の古墳時代へと継続するものが多い。

弥生時代後期から古墳時代前期の墳墓は、これまでに野山遺跡群、能峯遺跡群、下井足遺跡群、大王山遺跡群、キトラ遺跡などで確認されている。この頃の集落としては、戸石・辰巳前遺跡、高田桓内遺跡、能峯中島遺跡、上井足北出遺跡、谷遺跡などを挙げることができ、谷部を流れる川跡や堅穴式住居跡などが確認されている遺跡もある。

古墳時代前期の古墳は谷畠古墳、中期の古墳としては高山1号墳、シメソ坂1号墳、前山1号墳などが発掘調査によって明らかにされている。後期となると古墳数は著しく増加し、ある程度の粗密があるものの、町内各所の尾根上には數基から十数基単位で分布している。5世紀後半から盛期を迎える古墳群は野山古墳群、沢古墳群、栗谷古墳群、大王山古墳群、丹切古墳群などが知られている。6世紀後半以降、今までの木棺直葬墳にかわって横穴式石室墳が築造されるようになり、丹切古墳群、能峯古墳群、石田古墳群、大貝古墳群、西谷古墳群をはじめ、多くの古墳が発掘調査によって状況が明らかになっている。

横穴式石室にかわる新しい葬法として火葬墓が登場してくるが、最も代表的なものが、壬申の乱で活躍した将軍のひとりで渡来系氏族でもある文祢麻呂の墳墓である。現在、墳墓は史跡、墓誌などの出土品は国宝となっている。

古代末には宇陀においても庄園の開発が急速に進み、このなかで台頭してきた在地武士団は、興福寺、春日社などの支配のもと各自が發展を続けた。この武士団は「宇陀三人衆」の秋山氏・沢氏・芳野氏に代表され、彼らは秋山城、沢城、芳野城をそれぞれの居城としていた。また、小規模な城館跡も各所に点在しており、城館の廃絶後、中世墓地と化したところもある。いわゆる中・近世墓地は、まとまったところでは、大王山遺跡、能峯遺跡群、八咫島遺跡群、野山遺跡群などが発掘調査により明らかにされている。

(参考文献等省略)



圖2 1993年度調查道路位置圖

III 自明廣田遺跡発掘調査概要

1 調査の契機と経過

榛原町自明に所在する本遺跡は、縄文時代及び中世の遺物散布地として榛原町遺跡地図にも登載（榛原町遺跡地図番号4-5）しているところである。この遺物散布地内の一帯において、水田の形状変更が実施されることとなり、土地所有者（個人）より平成5（1993）年10月7日付けで「埋蔵文化財発掘届」が提出された。関係者等が遺跡の取り扱い及び発掘調査の実施方法等について協議を行った結果、榛原町教育委員会が国庫補助事業として発掘調査を担当することとなった。発掘調査は、遺構・遺物の状況等を確認する試掘調査を行い、その状況によっては、改めて本調査を実施することとした。発掘調査は事務手続を経たのち、現地調査を1993年11月15日に行った。なお、遺跡名は大字名と小字名の一部から「自明廣田遺跡」とした。

調査関係者は次のとおりである。

調査主体 榛原町教育委員会（教育長 山尾正弘）
調査担当課 榛原町教育委員会 社会教育課（課長 奥田信雄）
調査担当者 榛原町教育委員会 社会教育課技師 柳澤一宏
調査補助員 井上好美、松田美幸
調査指導 奈良県教育委員会 文化財保存課
調査協力 桶谷謙三

2 位置と環境

自明廣田遺跡は、榛原町の市街地から約2.5kmの東方、内牧川左岸の段丘上や初生川によって形成された小谷部に位置する。明確な遺跡の範囲は明らかにできないが、東西約150m、南北約150mが遺跡の範囲と推定している。調査地は内牧川との合流部分に近い初生川左岸である（図3）。

自明廣田遺跡の東方約400mには中世の山城・桧牧城跡、西方の対岸には桧牧庄の一部とも推定される坊ノ浦遺跡（縄文時代、平安時代～中世の遺物散布地）が広がる。遺跡の北端には、大和と伊勢とを結ぶ「伊勢本街道」が通り、現在では国道369号線がその役割を担っている。

3 遺跡の調査

（1）調査区と基本土層

発掘調査（試掘調査）は、事業地のはば中央部分で行い、東西約6m、南北約2mのトレンチを設定した。基本土層は、上から順に耕作土（1層・厚さ約25cm）、灰色土（2層・厚さ約15cm）、

茶灰色砂疊（3層）となっている。後述のとおり遺構・遺物が検出されなかつたため、わずかな面積を調査したに過ぎない（図4・5、図版1）。

(2) 検出遺構

明確な遺構は認められない。

(3) 出土遺物

明確な遺物は認められない。



図3 自明廣田遺跡位置図

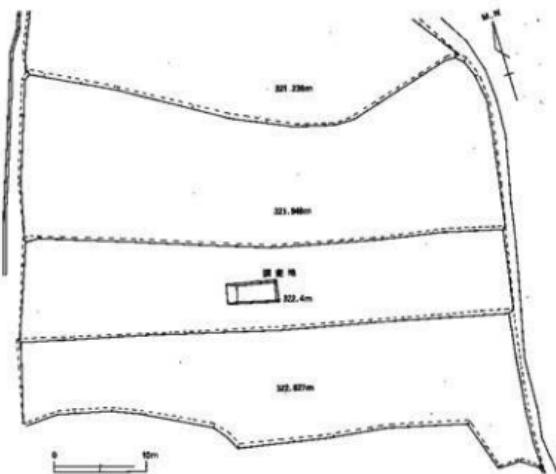


圖4 自明廣田遺跡調查位置圖



圖5 自明廣田遺跡土層斷面圖

4 ま と め

第3層の茶灰色砂礫は、初生川の河川氾濫等に伴う堆積層とも考えられるが、その掘削が容易ではなく、また、遺構・遺物を検出していないため、地表下約70cmでその調査を終えることとした。遺跡の中心は、調査地より西方の内牧川の河岸段丘上と推定される。

5 抄 錄

遺 跡 名	自明廣田遺跡（奈良県遺跡地図番号 未登載、榛原町遺跡地図番号 4-5）
調 査 地	奈良県宇陀郡榛原町大字自明1356番地
遺 跡 立 地	標高約320~340mの河岸段丘・谷部
遺 跡 規 模	南北約150m、東西約150m
種 別	绳文時代、中世の遺物散布地
調 査 主 体	榛原町教育委員会
調 査 原 因	水田の形状変更（事業者：桶谷謙三）
現地調査期間	1993年11月15日
調 査 面 積	12m ²
検 出 遺 構	なし
出 土 遺 物	なし
資料等の保管	榛原町教育委員会（文化財整理室）

IV 下城・馬場遺跡第2次発掘調査概要

1 調査の契機と経過

下城・馬場遺跡は榛原町大字沢に位置し、沢城跡から南方へ派生する尾根筋とその間を流れる小支流によって形成された小規模な谷地形の先端部の一角を占めている。遺跡は尾根の西斜面に広がり、3段に及ぶ平坦面が形成されている。遺跡の現状は、大半が畠地や水田となっており、以前から縄文時代から中世にいたる遺物が散布しているところでもある。1984年（昭和59年）には、遺跡の西端の一部を発掘調査（第1次調査）¹⁾し、井戸、土坑、ピット等を検出し、12世紀後葉から13世紀中葉の土器などが出土している。また、下層の流路内からは縄文時代晚期、弥生時代前期の土器片が出土している（図7・8・12）。

最高所の平坦面において、個人による土地改良工事が計画され、平成4（1992）年12月14日付けで「埋蔵文化財免掘届」が提出された。関係機関が遺跡の取り扱い及び発掘調査方法等を協議した結果、榛原町教育委員会が国庫補助事業として発掘調査を担当することになった。現地調査（第2次調査）は事務手続き等を経たのち、1994年1月18日から1994年3月18日にかけて実施した。

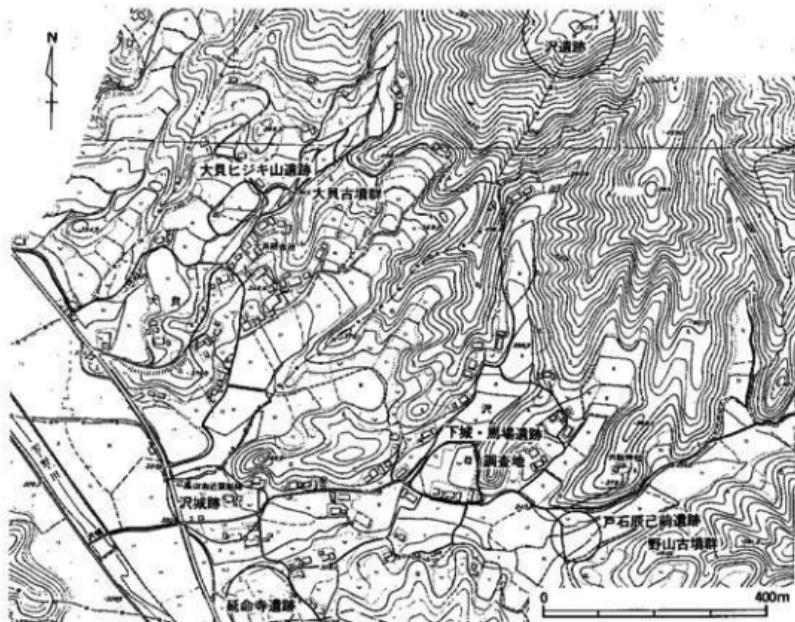


図6 下城・馬場遺跡位置図

調査関係者は次のとおりである。

- 調査主体 梶原町教育委員会（教育長 山尾正弘）
調査担当課 梶原町教育委員会 社会教育課（課長 奥田信雄）
調査担当者 梶原町教育委員会 社会教育課 技師 柳澤一宏
調査補助員 井上好美、山本美恵子、松田擁、松田美幸、南信子、徳田典子、宮田美穂、田中知紀、藤田真理子
調査作業員 田中昇、太田政信、砥出愛子、北中美代子、樋原美知子、太田睦子、
田中京子、岡野イエ、池田圭子、中谷喜代子、藤本タカ子、小林マン、
棚田幸子
調査指導 奈良県教育委員会 文化財保存課
調査協力 沢自治会、龍美建設、㈱アイシー、山川均

2 位置と環境

下城・馬場遺跡は、先述のとおり、尾根の西斜面、標高約339m～351mの一角を占めており、芳野川方向の西方への眺望が比較的良好で、遠く、宇陀地域の代表的な中世山城である秋山城跡を望むことができる。また、北方には沢城跡や伊那佐山を仰ぎ見ることができる。この遺跡の周辺は、繩文時代～中世の沢遺跡、弥生時代～中世の延命寺遺跡、古墳時代前期の戸石・辰巳前遺跡や古墳時代前期～後期の野山古墳群などの遺跡が密集している地域でもある（図6）。

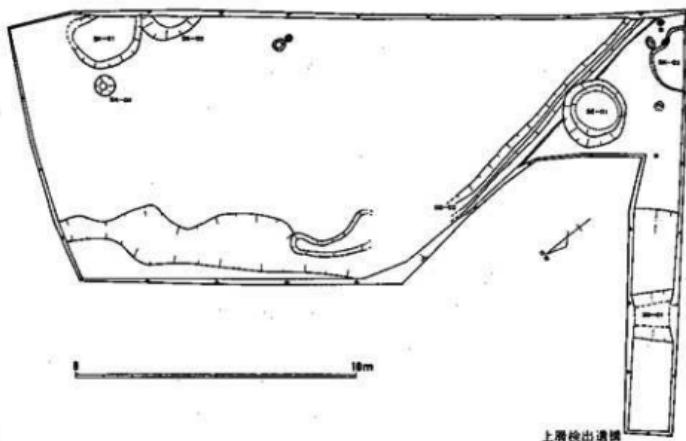


図7 下城・馬場遺跡第1次調査検出遺構平面図

3 遺跡の調査

(1) 調査区と基本土層

最高所の平坦面のほぼ中央の2箇所において、東西方向のトレンチを設定し、北側を第1トレンチ（長さ約22m、幅約4m）、南側を第2トレンチ（長さ約26m、幅約4m）とした。第2トレンチは、畑地の耕作によってかなりの擾乱を受けていたが、第1トレンチでは、良好な状況で遺構・遺物を検出することができた（図8、図版2～10）。

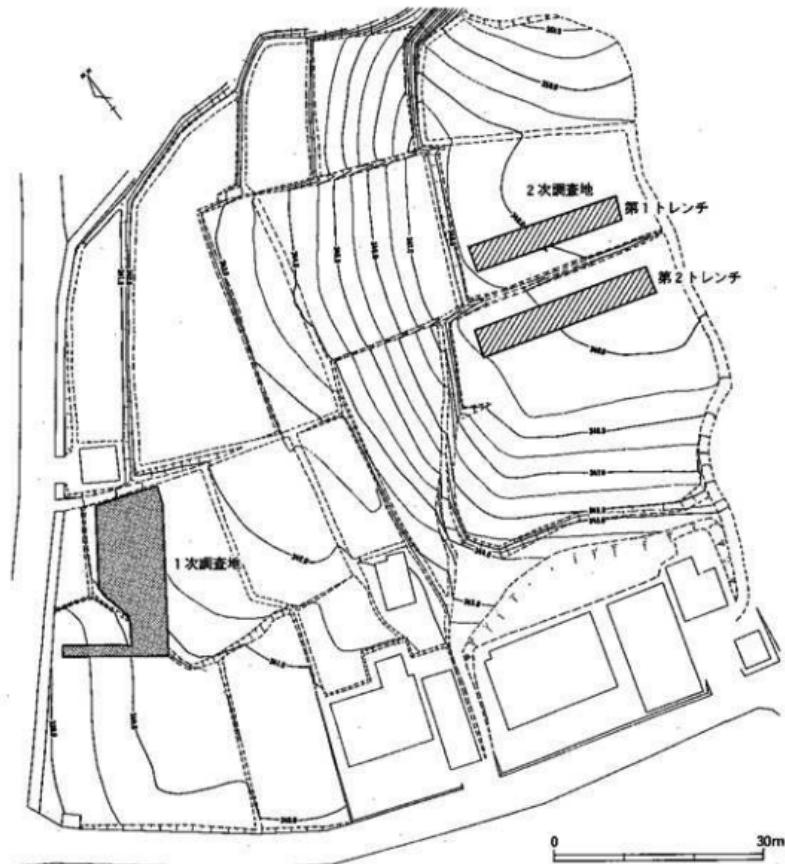


図8 下城・馬場遺跡調査位置図

第1トレントの基本土層は、第1層が耕作土、第2層がにぶい黄橙色砂質土等、第3層が黄灰褐色土・にぶい黄褐色土等、第4層が黒褐色粘質土、第5層が明褐色土砂質土・灰黃褐色土・黒褐色土となっている。第6層は明褐色砂質土・黄褐色砂質土・褐色砂質土が版築状に因く締まっている(図9・10、図版6)。

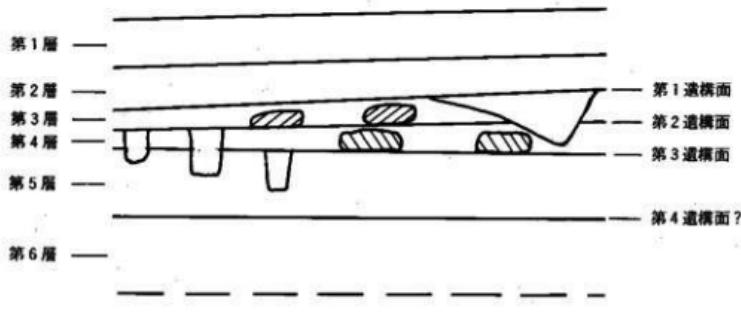


図9 下城・馬場遺跡基本土層断面模式図

(2) 検出遺構

遺構面は、少なくとも3時期が認められる。第1造構面では溝・ピット等、第2造構面では礎石建物遺構・ピット等、第3造構面では礎石建物遺構・ピット・土坑等が認められる。第2・3造構面には、焼上面が認められ、いずれの礎石も焼けた状況である。第2造構面の遺構をできる限り保つことに留意したため、第3造構面の遺構を全面的には検出していない。発掘調査面積が狭いことから、具体的な建物配置等は明らかにできない。なお、6層以下の掘り下げは、調査面積の都合で行っておらず、地山面は未検出である(図10、図版5~10)。

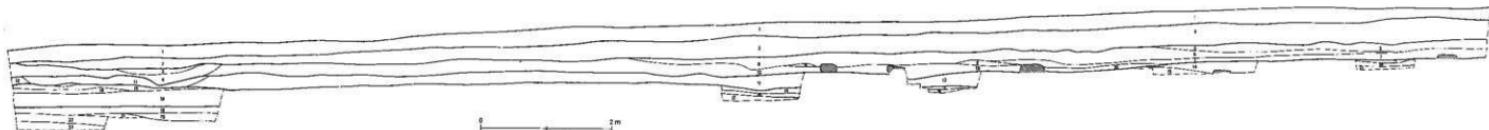
土坑105(図版9)

第1トレント西半の第3造構面において長さ93cm、幅53cm、深さ約7cmの平面形態が梢円形の土坑を検出した。土坑内からは3点の土師皿等が出土している。また、その周辺からは1点の土師皿も出土している。埋土は暗褐色土である。

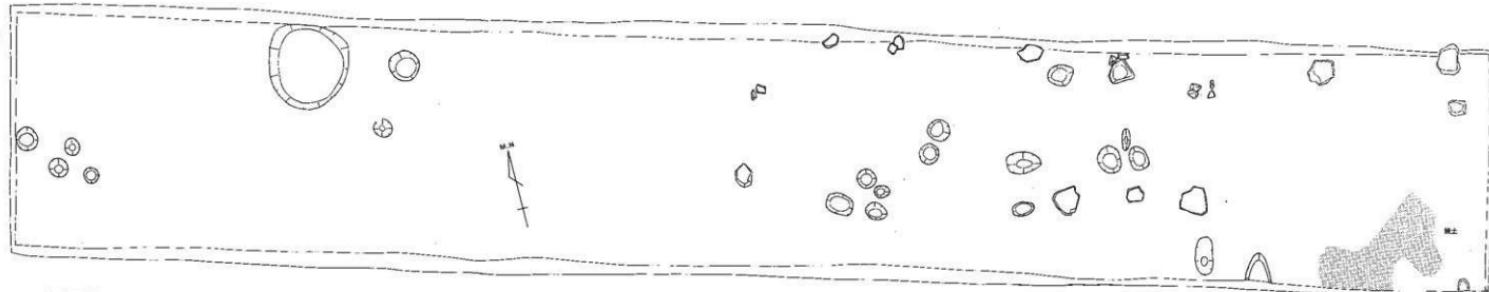
土坑232(写真2)

第2トレントの第2造構面から長さ100cm、幅65cm、深さ25~30cmのやや不整形の梢円形土坑を検出した。土坑埋土は炭片を含む褐色土で、土坑内からは平瓦片、焼石などとともに半分に割れた石臼1点が出土している。

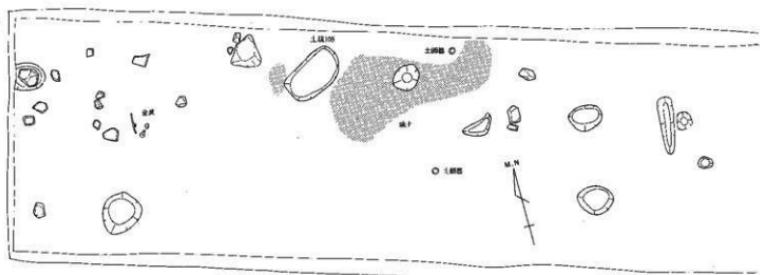
L=30m



第2 連携面



第3 連携面



- | | | | |
|----|------------|---------------|------------|
| 1 | 土 | + | 1層 |
| 2 | にない黄褐色 砂質上 | (10YR 6/3) | 2層 |
| 3 | に多い黄褐色 土 | (10YR 5/3) | |
| 4 | 砂 | + | (10YR 3/3) |
| 5 | 褐色 砂質 黄 | 土 (7.5YR 4/4) | |
| 6 | 黄褐色 沈積物 | 上 (10YR 5/2) | |
| 7 | 褐色 沈積物 | 上 (10YR 5/2) | |
| 8 | 褐色 沈積物 | 上 (10YR 5/2) | |
| 9 | 褐色 沈積物 | 上 (10YR 5/2) | |
| 10 | に多い黄褐色 土 | (10YR 4/3) | |
| 11 | 灰褐色 沈積物 | 土 (10YR 4/2) | |
| 12 | 黑褐色 沈積物 | 上 (10YR 2/2) | |
| 13 | 黒褐色 沈積物 | 上 (10YR 3/2) | 4層 |
| 14 | 灰褐色 沈積物 | 土 (10YR 5/2) | |
| 15 | 明褐色 沈積物 | 土 (7.5YR 5/6) | |
| 16 | 灰褐色 沈積物 | 土 (10YR 4/2) | |
| 17 | 褐色 沈積物 | 土 (10YR 5/6) | 5層 |
| 18 | 褐 | 土 (10YR 3/2) | |
| 19 | 褐色 沈積物 | 土 (7.5YR 5/6) | |
| 20 | 灰褐色 沈積物 | 土 (10YR 5/2) | |
| 21 | 明褐色 沈積物 | 土 (7.5YR 5/6) | 6層 |
| 22 | 明褐色 沈積物 | 土 (10YR 5/6) | |
| 23 | 褐色 沈積物 | 土 (10YR 4/6) | |

図10 下城・馬場遺跡第1トレンチ 連携平面図・土層断面図



写真2 下城・馬場遺跡第2トレンチ 土坑232

(3) 出土遺物

遺物は第3～4層から比較的多く出土している。主なものとしては、サスカイト片、須恵器、瓦器、土師器、瓦質土器、陶器、磁器、大形土製品、瓦、鉄釘、鉄滓、ガラス滓、錢貨、銅製品、石臼等が認められ、整理箱30箱相当が出土している。これらの遺物は現在、整理中のため本項で詳細を明らかにできないが、その一部を概述し、詳細については、後日に報告することとした。

土器

瓦器椀と土師皿が多く出土している。第6層出土の瓦器椀（図11・図版9）は口径12cm、器高3.5cmあり、内面には荒い渦巻き状暗文を施す。底部には断面が逆三角形の薄い高台を張り付け、胴部底面が高台底面より突出する不安定なものである。川越編年のⅢ段階D型式、松本編年的土坑-10（新）期に比定できる。

この他、土釜、瓦質摺鉢、瓦質火鉢、青磁碗、白磁碗なども認められる。

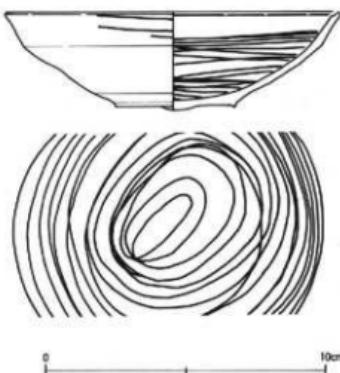


図11 下城・馬場遺跡出土遺物実測図

犬形土製品

第3層から瓦質の犬形土製品1点が出土している（写真3～5）。四脚と尾を欠損しているが、体長5.3cm、体幅2cm、現存体高3.3cmを測る。

銭貨

第1トレントの第3層からは、13点の銅錢が出土しており、開元通寶2点、至道元寶（行書体）1点、天聖元寶（真書体）1点、天聖元寶（篆書体）1点、至和通寶（真書体）1点、熙寧元寶（真書体）1点、永樂通寶2点を確認している。第2トレントのピット内からは、開元通寶1点、熙寧元寶（真書体）1点、元符通寶（真書体）1点が出土している。

銅製品

第3層～4層にかけて水滴（写真6）、建具環状把手（写真7）、簪（写真8）、飾金具（図版7）、鏡片などが出土している。

4 ま と め

下城・馬場遺跡は、以前から縄文時代から中世の遺物散布地とし知られている。1984年（昭和59年）の第1次発掘調査では縄文土器（晩期）、弥生土器（前期）、中世土器が出土し、弥生時代の流路、中世の井戸、土坑、ピット等も検出している。散布地の小字名である「下城」、「馬場」から沢城及び沢氏に関係した居館跡と考えている遺跡でもある。

第1トレントでは少なくとも、3時期の遺構面が確認でき、第2・3の遺構面の各所には、焼土・炭屑が認められる。調査面積が狭いため、遺構全体の構成は明らかにできないものの、第2・3遺構面には、数棟の礎石建物が想定でき、第1トレントの北方にその広がりが考えられる。これらの礎石はいずれも焼けており、火災によってその建物が焼失したことが考えられる。

出土土器から第2遺構面は14世紀中葉～後葉、第3遺構面は14世紀前葉～中葉、第3遺構面下の整地層（第6層）は13世紀後葉～末葉の時期が考えられる。出土遺物は、瓦器、土師器、瓦質土器が大半を占めるが、輸入陶磁（青磁・白磁）、輸入銭貨も認められる。また、瓦質の大型土製品はその類例が少なく、しかも比較的古い時期に位置付けられる。

沢氏の居館跡と考えられる下城・馬場遺跡は、整地、火災、整地が繰り返されているものの、12世紀～14世紀にわたって、その機能を果たしており、宇陀地域の中世城館跡を調査・研究する上において重要な遺跡である。

中世以前の遺構検出にも努めたが、それは明らかでなく、調査地周辺では中世の整地の際、その大半が削平されたものとも考えられる。遺物の散布状況から縄文時代～弥生時代の遺構は、第2次調査地の平坦面より第1次調査地周辺の最下段の平坦面にあると推定できる。

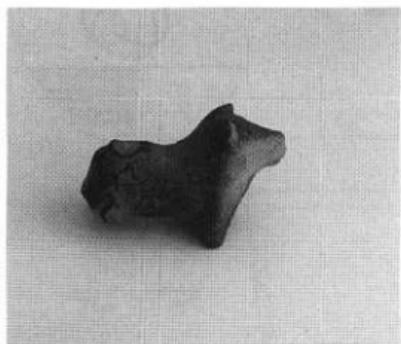


写真3 第1トレンチ出土 犬形土製品（右側面）



写真4 第1トレンチ出土 犬形土製品（左側面）

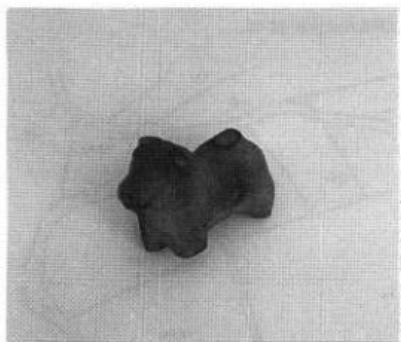


写真5 第1トレンチ出土 犬形土製品

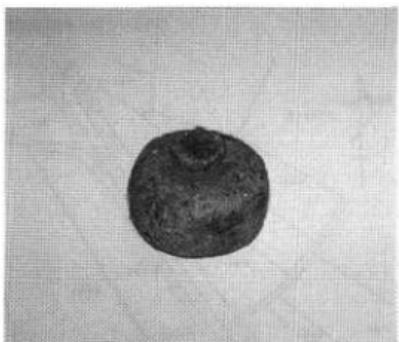


写真6 第1トレンチ出土 水滴



写真7 第1トレンチ出土 建具環状把手

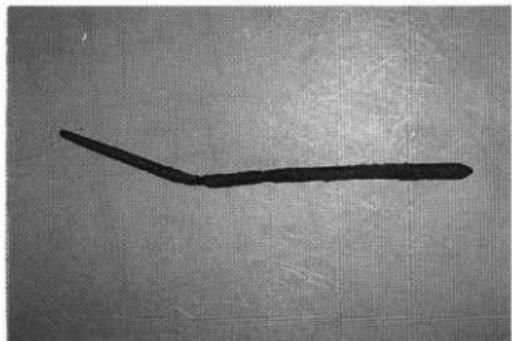


写真8 第1トレンチ出土 脈

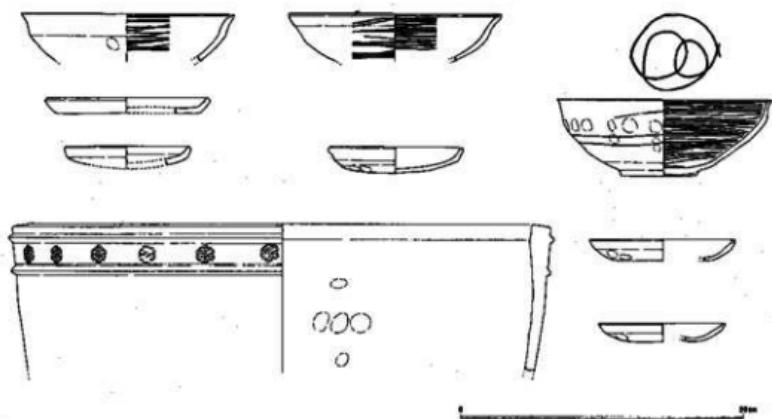


図12 下城・馬場遺跡第1次調査出土土器実測図

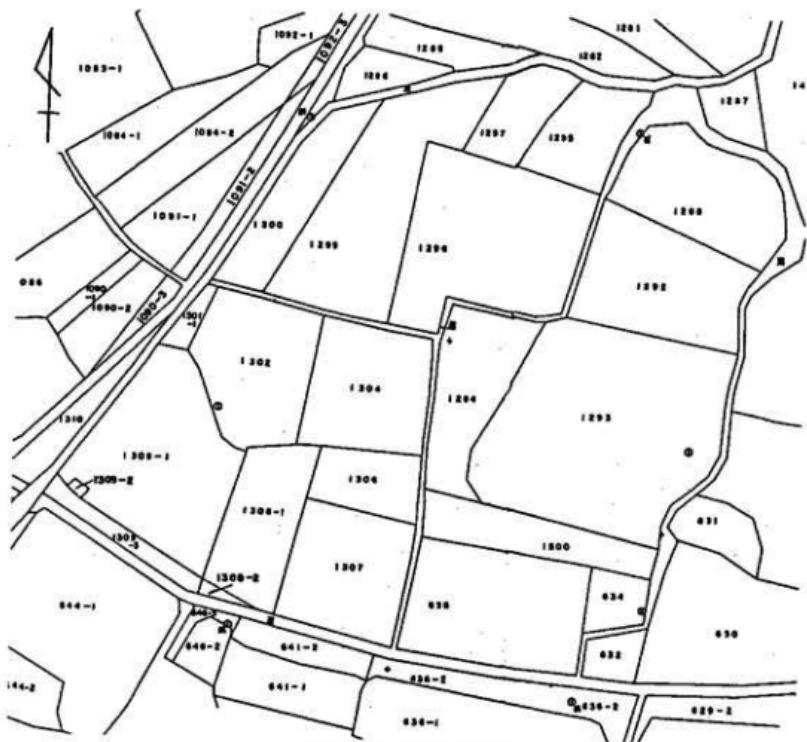


圖13 下城・馬場遺跡地籍圖

5 抄 錄

遺 跡 名	下城・馬場遺跡（奈良県遺跡地図番号 15-D-84、橿原町遺跡地図番号 2-544）
調 査 地	奈良県宇陀郡橿原町大字沢1292、1293番地（小字名：下城）
遺 跡 立 地	標高約339m～約351mの尾根上・谷部
遺 跡 規 模	南北約120m、東西約100m
種 別	縄文時代、弥生時代、古墳時代、中世の遺物散布地、中世の居館跡
調 査 主 体	橿原町教育委員会
調 査 原 因	個人による土地改良工事
現地調査期間	1994年1月18日～1994年3月18日
調 査 面 積	約195m ²
検 出 遺 構	礎石建物遺構、掘立柱建物遺構、土坑、ピット、溝
検 出 遺 物	サスカイト、須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、陶器、磁器、鐵貨、鐵釘、鐵滓、銅製品、ガラス滓、石臼、砥石、犬形土製品、瓦など 一整理箱30箱
資料等の保管	橿原町教育委員会（文化財整理室）

註1) 柳澤一宏『下城・馬場遺跡』 橿原町教育委員会 1985

註2) 川越俊一「大和地方出土の瓦器椀をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』 奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会編 1983

註3) 松本洋明『十六面・薬王子遺跡』 奈良県立橿原考古学研究所 1988

V 南山古墳第2次発掘調査概要

1 調査の契機と経過

(1) 調査史抄

南山古墳は、古くからその存在が知られており、1892年（明治25年）起の『古墳墓調書』（図14）や1893年（明治26年）の『大和国古墳墓取調書』（図15）には、南に開口した薄積の横穴式石室の状況が描かれ、特異な古墳として注目されている。

1972年（昭和47年）には『宇陀福地の古墳』、1975年（昭和50年）には『宇陀・丹切古墳群』において横穴式石室の実測図が掲載され（図19）、墳丘や石室の状況が報告されている。また、1983年（昭和58年）には奈良県立橿原考古学研究所内の磚塚墳研究会によって墳丘の測量調査が行われている。

(2) 調査の契機と経過

南山古墳は、先述のとおり古くから知られた古墳で、横穴式石室（玄室）の各所には漆喰が残存している。近年、この横穴式石室の崩壊が進行しつつあり、天井石や側壁の一部は崩落しており、古墳の保全上、好ましい状況とはいえない。このような状況のもと、古墳の保存をはかっていくための基本資料を得るために、1992年度は墳丘の地形測量と現状の写真撮影（第1次調査）を行った。

そして、今年度は墳丘等の範囲確認を目的とした発掘調査を1994年3月14日から1994年3月29日



図14 『古墳墓調書』所収の南山古墳

図15 『大和国古墳墓取調書』所収の南山古墳

までの間、断続的に行った（第2次調査）。

調査関係者は次のとおりである。

調査主体 榛原町教育委員会（教育長 山尾正弘）
調査担当課 榛原町教育委員会 社会教育課（課長 奥田信雄）
調査担当者 榛原町教育委員会 社会教育課技師 柳澤一宏
調査補助員 南信子、宮田美穂、田中知紀
調査作業員 小林マン、棚田幸子、中谷喜代子、藤本タカ子
調査指導 奈良県教育委員会 文化財保存課、奈良県立橿原考古学研究所
調査協力 藤村恭之助、藤村多美、河上邦彦、豊岡卓之、泉森峻、楠元哲夫

(3) 現地調査日誌抄

1994年（平成6年）

3月14日（月）

器材搬入、調査区設定

3月15日（火）

第1～3トレンチ掘り下げ作業、地山及び墳丘盛土を検出

3月16日（水）

第1・3トレンチ写真撮影、第2トレンチ精査

3月17日（木）

第1～3トレンチ土層断面図作成、第2トレンチ写真撮影

3月18日（金）

平板測量

3月24日（木）

第2トレンチ精査

3月28日（月）

第1・2トレンチ一部拡張、土層断面図補筆、写真撮影、平板測量

3月29日（月）

トレンチ埋め戻し、器材撤出

2 位 置 と 環 境

南山古墳は、鳥見山から南東に派生する一尾根の標高約410～414mの稜線上に立地する。現在は、樹木によりその視界の大半は遮断されてはいるが、眼下には、『記紀』にある「墨坂」伝承地をは

じめ、弥生時代から古墳時代の遺跡群が広がっている。また、背後には鳥見山、香醉山などの山々が屏風状に聳えている。

南山古墳が位置する尾根上には、径6mの古墳状隆起が認められるに過ぎず、現在までのところ他の古墳は築造されていない（図16）。

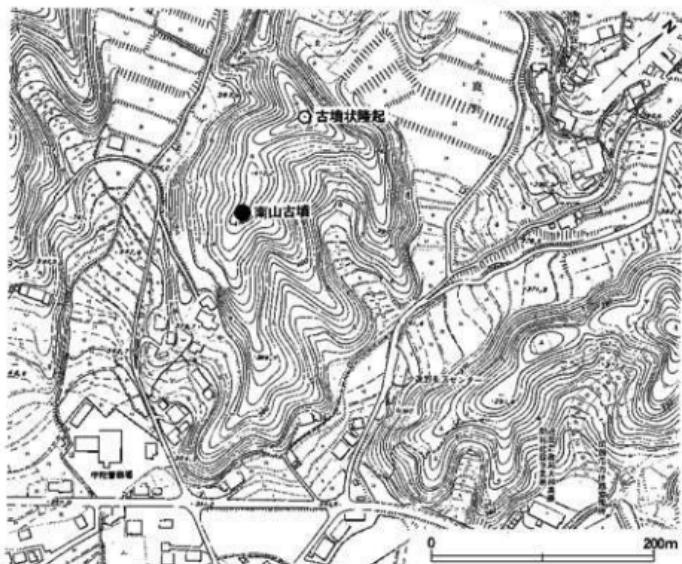


図16 南山古墳位置図

3 遺 跡 の 調 査

(1) 検 出 遺 構 (図17・18、図版13・14)

古墳は、北から南へと緩やかに傾斜する尾根稜線上に立地している。調査前の墳丘裾は南側が横穴式石室の擾乱により、幾分乱れているほかは、明瞭に認められ、調査前の地形測量図からは南北18m、東西16mの円墳と推定できる。また、傾斜地に築かれているため、北側と南側とではその高さに相違があり、南側で4.3m、背後の北側で1mとなっている。

今回の発掘調査は、古墳の墳丘裾等を確認する目的で西・北・東の3箇所にトレントを設定し、古墳西側を第1トレント、古墳北側を第2トレント、古墳東側を第3トレントと呼称している。

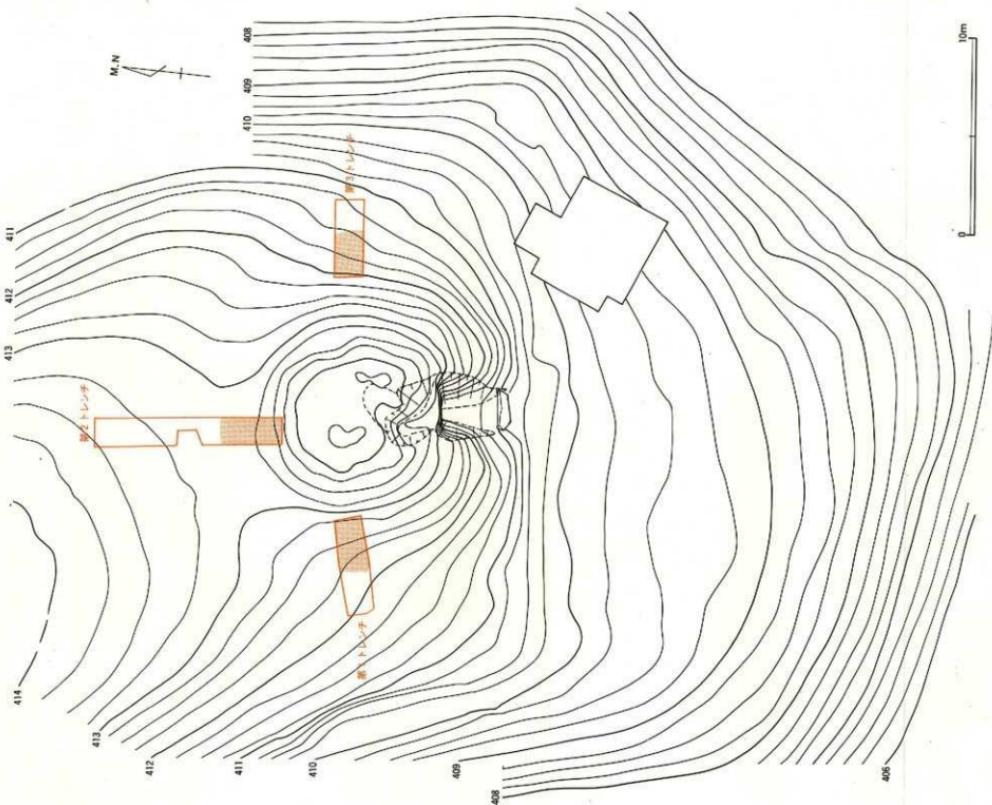
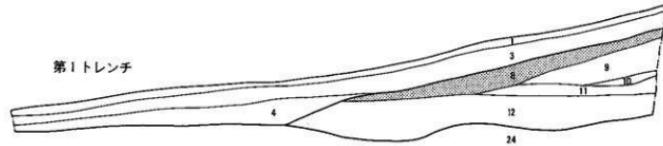


図17 南山古墳調査位置図

L=413m



L=414m

L=412m

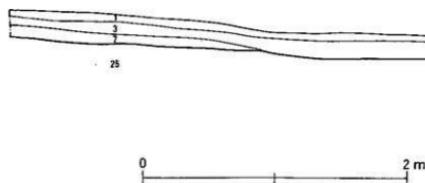
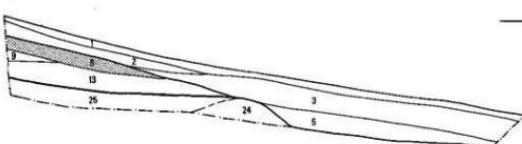


図18 南山古墳土層断面図

第1トレンチ

腐葉土及び褐色土を取り除くと墳丘盛土及び墳丘流土（褐色粘質土）を検出した。墳丘の築成にあたっては、まず、明赤褐色粘質土の地山面に黄褐色粘質土を約20~30cmの厚さに盛っている。その上に暗褐色土、明赤褐色土、黄褐色粘質土、黒褐色土を順に比較的薄く盛って墳丘を形成している。地表から墳丘盛土・地山面までの深さは約20~40cmである。墳丘裾部には、これを区画するような掘り割り（周溝）は認められない。

第2トレンチ

腐葉土及び褐色土を取り除くと墳丘盛土及び地山（明褐色粘質土）等を検出した。墳丘の築成は地山を穿った基礎を明褐色粘質土で埋め、その上に灰褐色粘質土を約10cmの厚さで盛ることからはじまっている。その後、地山と類似した明赤褐色粘質土と褐色土等を交互に盛り、最終工程では褐色粘質土と黒褐色土を全体の盛土として墳丘を仕上げている。

墳丘裾（背後）には明確な掘り割り（周溝）は検出されないが、暗褐色土及び褐色土を埋土とする幅約2.9m、深さ約10~20cmの浅い窪地が認められる。

第3トレンチ

腐葉土及び黄褐色土粘質土・褐色土を取り除くと墳丘盛土及び墳丘流土（橙色粘質土）を検出した。明褐色粘質土の地山面の上に褐色粘質土、黄褐色粘質土、黒褐色土を順に比較的薄く盛って墳丘を形成している。地表から墳丘盛土までの深さは約20~30cmである。墳丘裾に相当する地山を若干、成形しているものの掘り割り（周溝）は認められない。

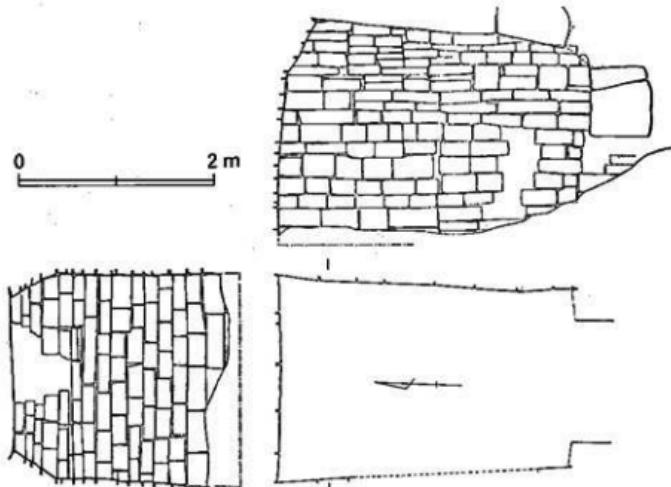


図19 『宇陀福地の古墳』所収の南山古墳石室実測図

(2) 出 土 遺 物

各レンチの流土や墳丘盛土から須恵器・土師器の破片が若干、出土しているが、古墳築造時期を示すようなものは認められない。細片のため図示できないが第2レンチ墳丘掘出土の須恵器杯身は田辺編年のMT-15型式のものである。

4 ま と め

わずかな面積の発掘調査ではあるが、検出盛土の状況から南北18m、東西17m、高さ1~4.5mの円墳と推定される。測量図によると、墳丘南裾の一部が直線的な等高線を描いているため、今後の調査によっては、何らかの人為的遺構が検出できる可能性もあろう。

全体は未確認ではあるが横穴式石室の墓壙は地山を穿っているものと考えられ、その上に盛土を施し墳丘を形成していると推定される。各レンチにおいて墳丘裾をめぐる掘り割りの確認につとめたが、それを明らかにすることはできない。第2レンチにおいては、当初、幅約2~3mの掘り割りを想定したが、緩やかに南傾する地山面のみである。



写真9 第3レンチ埋め戻し作業

第三章 研究



写真10 南山古墳石室（奥壁）



写真11 南山古墳石室（側壁）

5 抄 錄

遺 跡 名	南山古墳 <small>(奈良県遺跡地図番号 12-D-6、榛原町遺跡地図番号 1-14)</small>
調 査 地	奈良県宇陀郡榛原町大字萩原 元玉小西1868-1番地
遺 跡 立 地	標高約410~414mの尾根稜線上
種 別	古 墳
遺 跡 概 要	南北約18m、東西17m、高さ1~4.5mの円墳 埋葬施設は横穴式石室（磚積石室）
調 査 主 体	榛原町教育委員会
調 査 原 因	範囲確認調査（発掘調査）
現地調査期間	1994年3月14日~1994年3月29日
調 査 面 積	27m ²
検 出 遺 構	古墳盛土
出 土 遺 物	須恵器、土師器 若干
資料等の保管	榛原町教育委員会（文化財整理室）

註1) 薄木祐蔵『古墳墓調書一但宇陀郡の部一』 1892起

註2) 野淵龍潛『大和國古墳墓取調書』 1893

秋山日出雄編『大和國古墳墓取調書』 諸由良大和古代文化研究協会 1985

註3) 泉森皎他『宇陀福地の古墳』 奈良県立橿原考古学研究所 1972

註4) 堀田啓一・菅谷文則他『宇陀・丹沢古墳群』 奈良県立橿原考古学研究所 1975

註5) 田辺昭三『陶邑古窯址群』 I 平安学園考古学クラブ 1966

図 版



航空写真（1981年撮影）



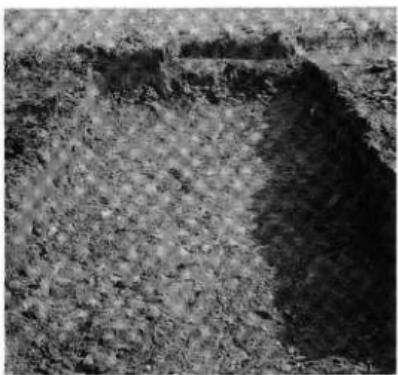
調査前（南東から）



調査後（南東から）



調査地（南西から）



調査地（西から）

圖版二 下城・馬場遺跡



航空写真（1981年撮影）

図版三 下城・馬場遺跡



空中写真（東から）

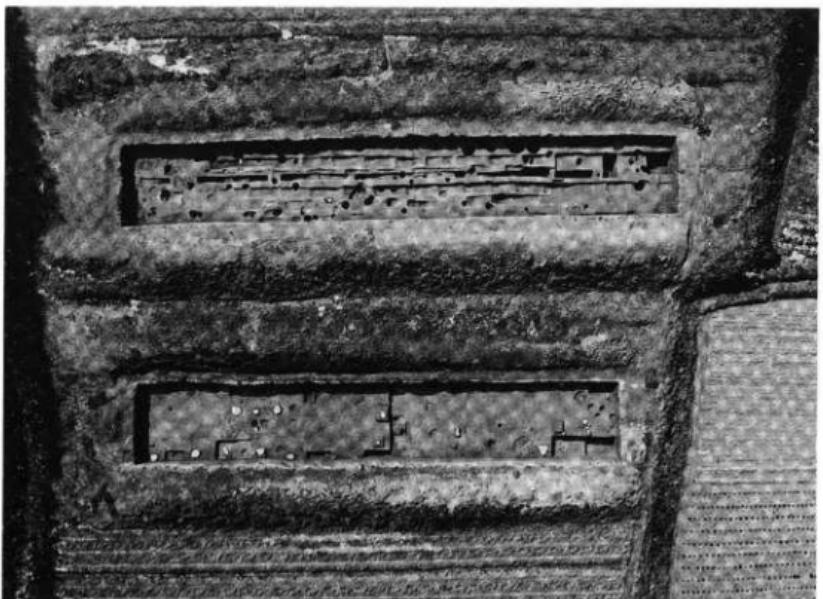


空中写真（南から）

図版四 下城・馬場遺跡



空中写真（北から）



空中写真（垂直）

図版五 下城・馬場遺跡

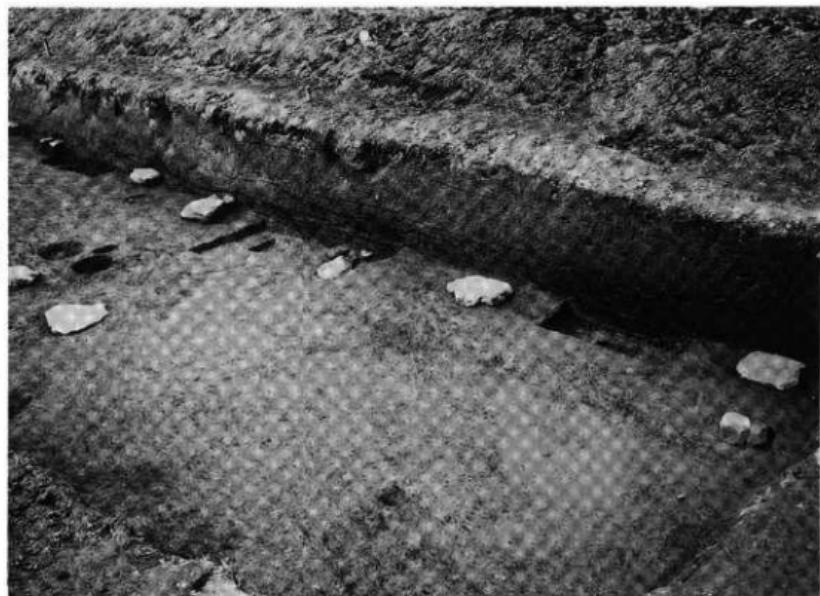


第1トレンチ（東から）

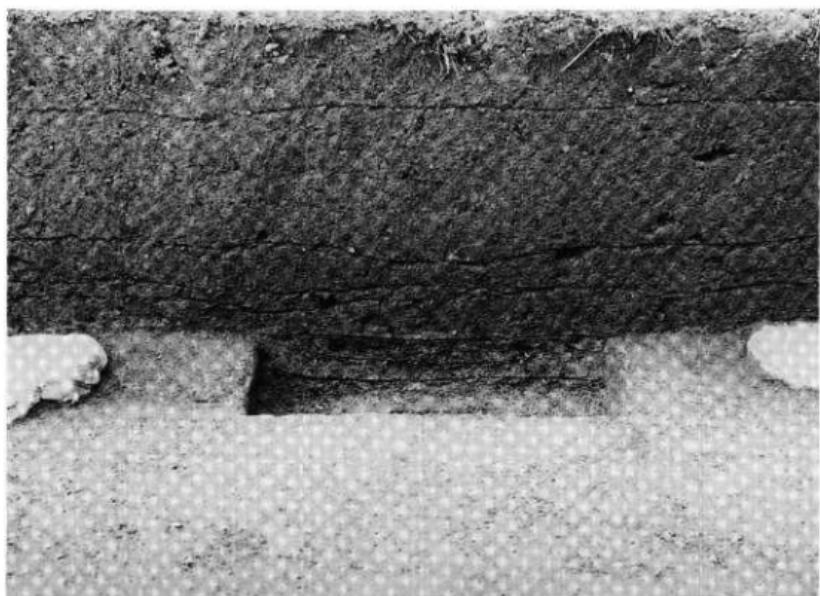


第1トレンチ（南西から）

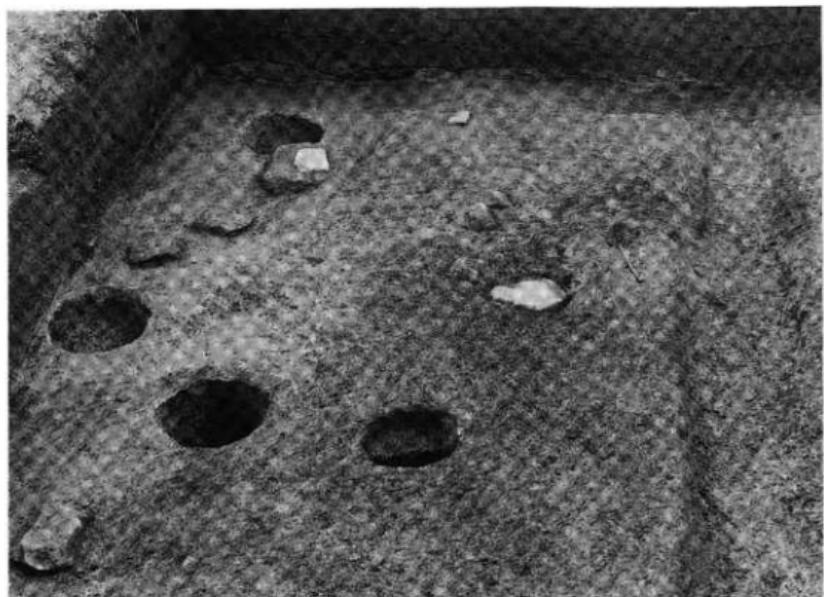
図版六 下城・馬場遺跡



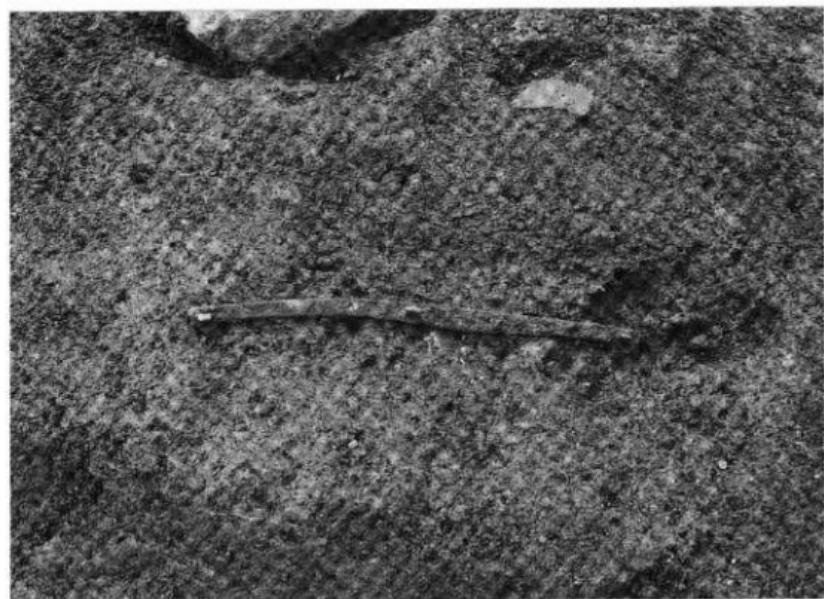
第1トレンチ（南東から）



第1トレンチ土層断面（南から）

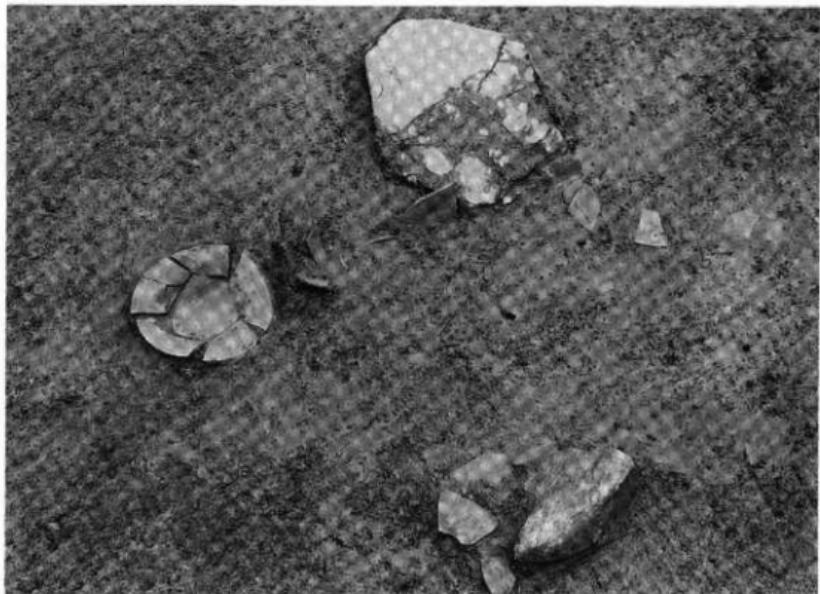


第1トレンチ第2遺構面（南から）

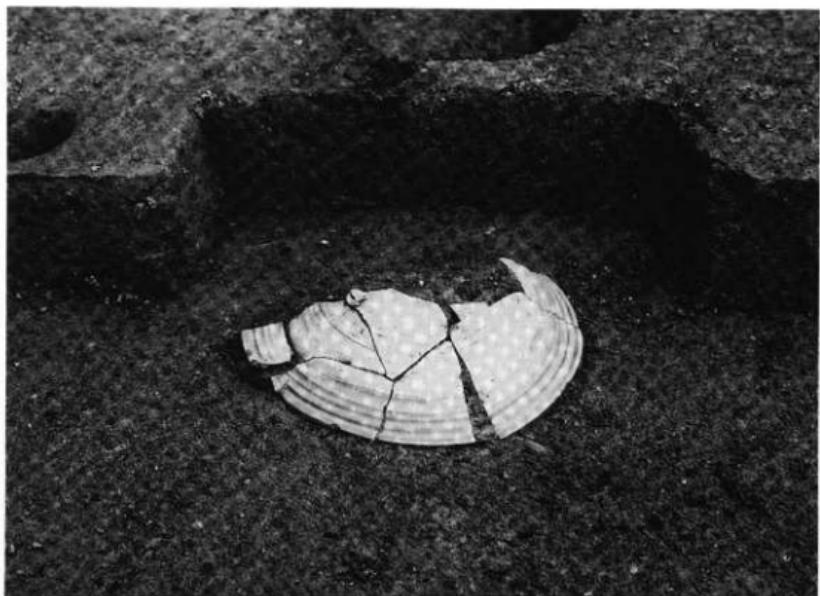


第1トレンチ出土状況（東から）

図版八 下城・馬場遺跡



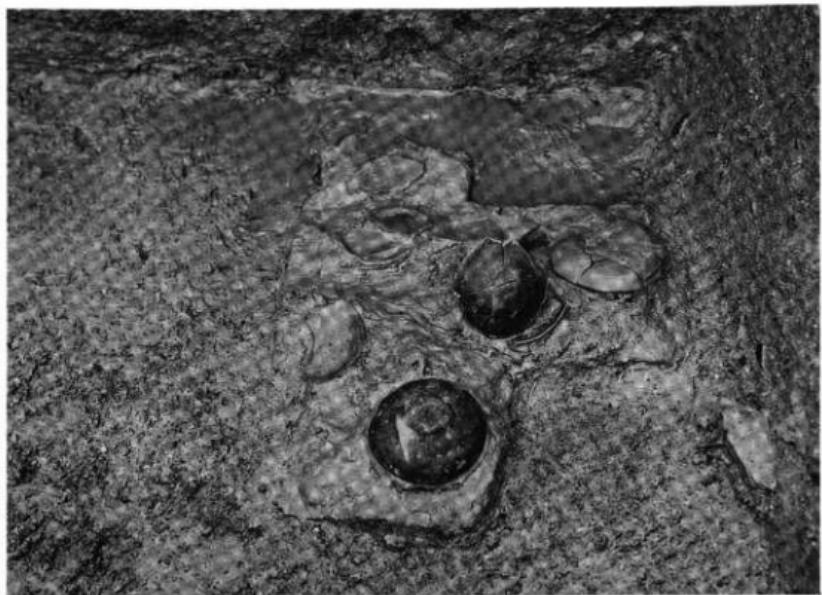
第1 トレンチ第2遺構面遺物出土状況（東から）



第1 トレンチ遺物出土状況（西から）



第1 トレンチ土坑105（南西から）

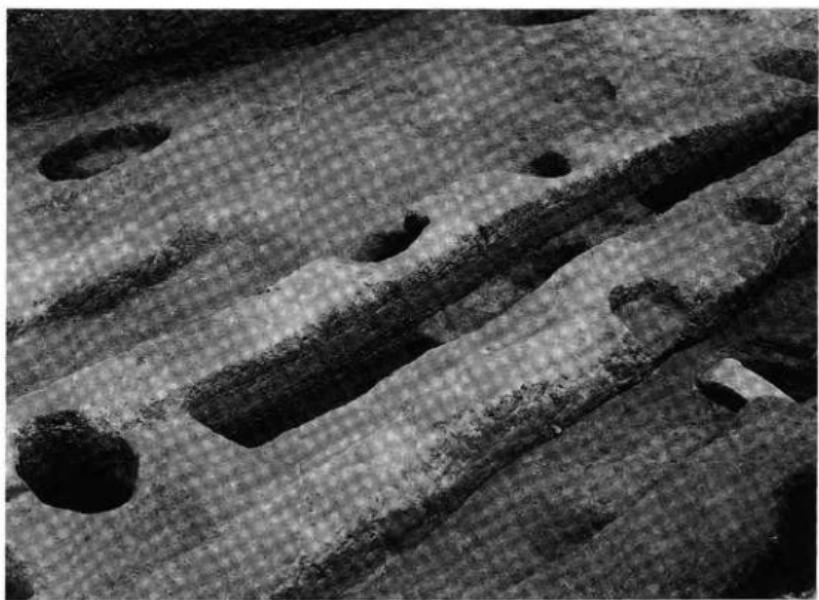


第1 トレンチ第6層遺物出土状況（南から）

図版一〇 下城・馬場遺跡

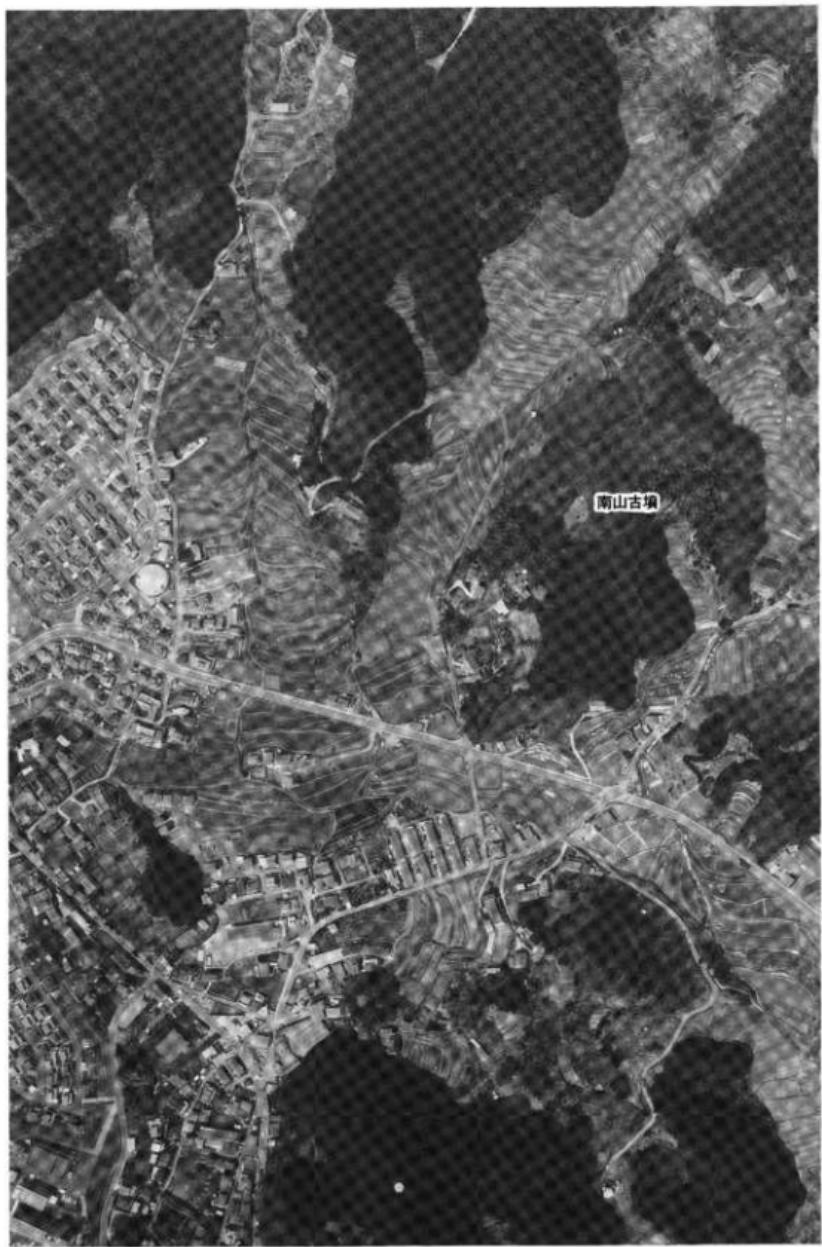


第2 トレンチ（東から）



第2 トレンチ土層断面（南西から）

圖版二
— 南山古墳



航空写真（1981年撮影）

図版一二 南山古墳



墳丘（南から）



墳丘（北から）



第1トレンチ（南西から）

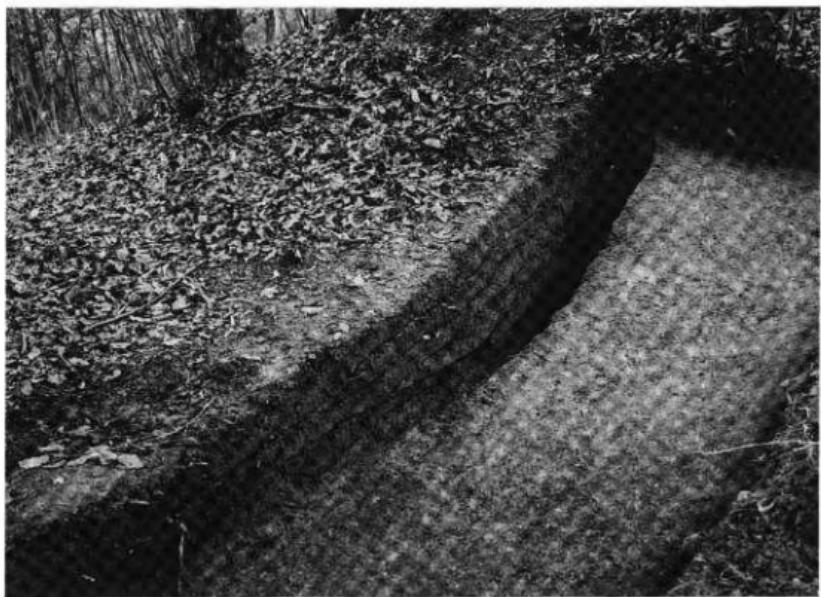


第3トレンチ（南東から）

図版一四 南山古墳



第2トレンチ（北西から）



第2トレンチ墳丘土層断面（北西から）

報告書抄録

ふりがな	はいばらちようないいせきはくつちょうさがいようほうこくしょ							
書名	榛原町内遺跡発掘調査概要報告書 1993年度							
副書名								
卷次								
シリーズ名	榛原町文化財調査概要							
シリーズ番号	11							
編著者名	柳澤一宏							
編集機関	榛原町教育委員会							
所在地	〒633-02 奈良県宇陀郡榛原町大字荻原164番地 TEL 07458-2-1301							
発行年月日	西暦 1994年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
自明廣田遺跡	奈良県宇陀郡榛原町 大字自明1356番地	29383	34度 30分 57秒	135度 59分 7秒	1993.11.15	12	個人の水田の形状 変更工事	
下城・馬場遺跡	奈良県宇陀郡榛原町 大字沢1292番地	29383	34度 29分 26秒	135度 58分 17秒	1994. 1.18～ 1994. 3.18	195	個人の土地改良工事	
南山古墳	奈良県宇陀郡榛原町 大字蔵原1868-1番地	29383	34度 32分 11秒	135度 57分 25秒	1994. 3.14～ 1994. 3.29	27	範囲確認 調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
自明廣田遺跡	遺物散布地	縄文時代、 中世	なし	なし				
下城・馬場遺跡	遺物散布地 城館跡	縄文時代～ 古墳時代、 中世	礎石建物遺構、 土坑、ピット	サヌカイト、須恵器、土師器、 瓦器、瓦質土器、陶器、磁器、 青磁、白磁、銅製品、鉄質、鐵 釘、鐵津、ガラス津、石臼、砥 石、犬形土製品、瓦ほか	14世紀の礎石建 物が上・下層で 重複。いずれも 火災で焼失。			
南山古墳	古墳	飛鳥時代	墳丘盛土、墳丘 裾	須恵器、土師器				

棟原町内遺跡発掘調査概要報告書 1993年度

棟原町文化財調査概要 11

1994年 3月31日 発行

編集 棟原町教育委員会
発行 奈良県宇陀郡棟原町大字荻原164番地

印刷 共同精版印刷株式会社
奈良市三条大路2丁目2番6号